退官に寄せたつぶやき

田辺征夫さん

退官？、ん、退職？まだ公務員だから退官でいいのか、と迷わせるところが、今の置かれた状況を物語っている。勤務年数は35年と9ヶ月。若い頃のサッカーによるひんぱんな怪我以外、幸いにして大病を患うこともなくここまで来ることができた。意外と丈夫にできているのだなあ、と思ってしまう。こう言うと、怪我の時に長く入院し、まわりに大きな迷惑をかけたので、勝手なことを言うな、とのお叱りを被りそうだ。

話のネタも語り尽くせないほどあるが、どうせ中途半端になるからやめておく。私の場合は、幸か不幸か、奈文研一筋ではなかったので、その「思ひ出」も複雑である。研究所をわりと醒めてみているところもある。ひとつ間違いないことは、20年以上前は、ほんとにゆったりした職場だったし、今も、まだ他所と比べるとそういう雰囲気は残っている。しかし、外から見ると同質社会の閉塞性、危うさ、脆さも垣間見える。要注意。

ところで、研究所に入ったときに持っていたもので何が手元に残っているかと考えてみると、ほとんどない。勤めてから数年後に、大奮発して買ったモンブランの万年筆か、ニコンＦぐらいかな。ニコンＦは、今やカメラバックの中で静かに眠っている。もちろん家電製品など何度も買い換えている。人事異動のせいか、引っ越しが多く、家具はよく傷み、かなり変わってしまった。世の中では、1969年式の車などとんと見かけないが、こちとら立派な69年式だ、とずっと威張ってみたい気もする。

最近、キトラや高松塚のカビ議論で教えられた。最も単純で原始的な生き物が一番丈夫であるらしい。そこで、老後は、今以上に単純化して・・・、つまりさらにぼーっとすることによって長生きできないか、などという詰まらぬことを考えてしまう。本当のカビにならないように、と言われそうだ。

（埋蔵文化財センター　田辺 征夫）

秋田県・胡桃館遺跡出土木簡の釈読

胡桃館（くるみだて）遺跡は、秋田県北部の北秋田市（旧、鷹巣町）に所在し、シラス層下に埋もれた古代の建物が、当時のまま出土した埋没建物遺跡として知られています。古代建築史研究の上で、十和田火山噴火の実年代を確定する上で、貴重な遺跡とされてきました。昨年の夏、この遺跡から出土した木簡が研究所に保管されていることに気付き、出土から37年ぶりに釈読を試みたのです。

木簡は、１辺約220㎜のほぼ正方形の板に、表裏両面にあわせて70字以上の文字が書かれたものです。内容は米を支給した帳簿で、９世紀後半頃の米代川流域に生きた人物の名もみえます。その一人「玉作麻呂（たまつくりのまろ）」は、元慶（がんぎょう）の乱に登場する同姓の俘囚（ふしゅう）の長「玉作正月麿（たまつくりのむつきまろ）」との関連も推測されます。胡桃館木簡は、風変わりな釈読の経緯もさることながら、律令国家の支配領域や北東北古代史の理解に一石を投じる資料として、論議をよぶことになりました。今後、調査研究の深化が期待されます。

2004年2月、史料調査室は、過去100年間に出土した31万点余に及ぶ全国の木簡出土情報を、『全国木簡出土遺跡・報告書綜覧』としてまとめました。その際、釈読が尽くされないまま保管されている、多くの木簡を再認識しました。胡桃館木簡もその一例なのですが、最新の赤外線機器の技術や、釈読の助けとなる類例の増加に支えられ、過去の調査をみつめなおすという一見地味な作業の積み重ねが、今回の解読や地域の宝の掘りおこしに結実したのだと思います。　（平城宮跡発掘調査部　山本 崇）

釈読された木簡（表面）＜赤外線デジタル写真＞